

4. 補助資料

①教員成果報告書

教員氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
石田宏之	豊橋港のコンテナターミナルの機能と役割(発展可能性)に関する調査研究	53
今井正文	iPad,iPhone で利用できるアプリケーション作成	57
加藤尚子	ヨシノパンプロジェクト	60
川戸和英	SOZO ショップ開店・運営プロジェクト	62
見目喜重	豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの 状況調査～	65
五味悠一郎	診療情報管理士認定試験の学習環境構築 2012	68
中野聡	田原のウインドファーム —社会的企業の実証研究	71
野口倫央	豊橋からオレオレ詐欺をブツ飛ばせ！！	72
三好哲也	豊橋トップインタビュー2012 プロジェクト	74
三輪多恵子	のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト	76
山口満	豊橋献血促進プロジェクト	80

豊橋港のコンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）に関する調査研究

石田宏之

1.プロジェクト活動の内容

(1)目的

調査研究の目的は、三河港豊橋コンテナターミナルの機能と役割（発展可能性）についてまとめることである。と同時に、この調査研究を通じて、「就業力（社会人基礎力）を高めること」である。

(2)方法

調査研究は、①文献研究および②実態調査（ヒアリング並びに現地視察）であり、調査した企業・箇所は以下のとおりである。

月日	調査対象箇所	協力者	調査内容
4月19日	日本通運株式会社 豊橋市店	次長 鈴木 敏道	・調査依頼（承諾してもらう。）
5月17日	日本通運株式会社 豊橋市店	次長 鈴木 敏道	・メンバーの自己紹介
6月7日	日本通運株式会社 豊橋市店	管理課長 尾崎 慎	・調査全体に対するアドバイス・注意事項 ・豊橋支店の業務内容
6月8日	日本通運株式会社 海運営業所	課長 堀見 典男	・海運営業所の業務内容 ・三河港豊橋コンテナターミナルの業務内容 ・貿易の業務、港の機能
7月8日	・豊橋市企業課港海活性情課 ・三河港コンテナターミナル株式会社	金田 紀之 専務取締役	・港海活性情課の業務内容 ・自動車コンプレックスについて
7月8日	愛知県三河港海務事務所	伊庭 雅裕 総務課主任	・三河港豊橋コンテナターミナルの概要説明 ・三河港豊橋コンテナターミナルの現状報告
8月1日	三河港豊橋コンテナターミナル	山本 真空 船務課主任 鈴木 和貴	
8月1日	三河港豊橋コンテナターミナル	海運営業所	・三河港豊橋コンテナターミナルの現地視察、 税関及び検疫に関するヒアリング
8月16日	日本通運名古屋国際輸送支店	課長 伊原 浩之	・鍋田埠頭コンテナターミナルの現地視察

(3)内容

全国の港は平成 23 年 3 月 31 日に港湾法を改正により、特定重要港湾を国際戦略港湾、国際拠点港湾の二つと重要港湾、地方港湾の 4 つに分けられた。また、前年には重要港湾から 43 港を「重点港湾」として選定し、三河港は重点港湾になった。

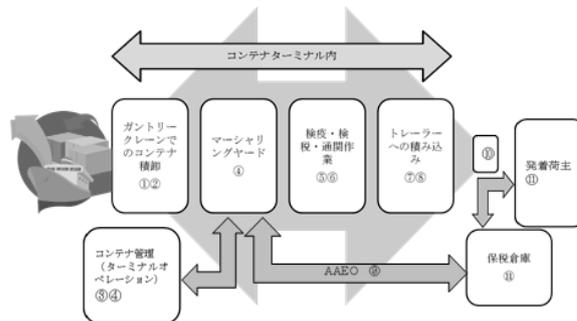
三河港は右記の図の通り、6つの地区から構成され、神野地区と明海地区を合わせて「豊橋港」と呼んでいる。

豊橋港は隣接する田原地区とともに、国内の完成自動車の輸出基地であるとともに、輸入完成自動車の基地(三河港全体で全国 1 位の取扱量を誇っている)となっている。また、公共ふ頭では、自動車と並んで、「コンテナターミナル」の取り扱い割合は、自動車に次いで約 14%を占めており、拡大傾向を示している。



コンテナターミナルのオペレーション(作業の流れ)は下図の通りとなる。

輸出入コンテナの発着から荷主までの流れ



(4)結論

コンテナターミナルの機能と役割(発展可能性)についてまとめると以下の通りとなる。

三河港は「重点港湾」として、「国際拠点港湾」である愛知県の名古屋港及び三重県の日四市港との連携を図りながら、輸出入完成車の拠点であるとともに、「アジア向けコンテナターミナル基地」機能を果たす役割を担っている。

豊橋コンテナターミナルの後背圏は広く、立地している企業も多いため、コンテナ貨物の潜在量はかなりあると推測される。また、現状のコンテナターミナルの能力は、現状の 2 倍の量を取り扱うことができる。今年度(24年)には、ロシア向け

の自動車関連商品等の航路が開設され、約 1.8 倍の取扱量となる。

数量拡大に伴い寄港の数を減らすことによりリードタイムの短縮と 1 個当りコンテナの輸送費の削減を図ることができる。また、数量拡大は、アジア地区への直行便の開設も今後考えられる。

以上、豊橋コンテナターミナルが有するメリットは、①低廉性、②通関の迅速性、③緊急時対応の迅速性、④国際ナショナルモーダルシフトが可能などであり、今後の発展が期待されている。

そのための課題を列举すると以下の通りである。

名古屋港、四日市港、豊橋港間の内陸フィーダーサービスを充実させ、アジア向けコンテナ輸送拡充のための連携を図ること。そのための方法の一つとして、コンテナ単位にならない貨物（LCL 貨物）を対象とした LCL サービスの拠点港として豊橋コンテナターミナルを位置づけること。

豊橋港の後背圏に立地する荷主に対して、アジア向け貨物だけで分離して引き受けるのではなく一括して貨物を引き受け、アジア向け以外の貨物については、フィーダー輸送により名古屋港あるいは四日市港に輸送するシステムを構築すること。

数量拡大に備えて、コンテナヤード内の ICT 化の促進とヤード内のより一層の機械化を図ること。特に、オペレーション業務をコンピューターで管理すること。

ヤード内の作業の効率化を図るために、7 号岸壁、8 号岸壁の統合を図ること。

ダメージコンテナの修理のために、船会社をターミナル内に設けること。

三河公務所、三河振興会および豊橋コンテナターミナル株式会社などの連携のもとにコンテナ貨物の拡大のためのポートセールスの充実を図ること。

2.プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトでは、経済産業省が推進している 3 つの能力 12 の能力要素のなかから、「チームで働く力から、『発信力』および『傾聴力』、「前に踏み出す力」から『主体性』、「考え抜く力」より『計画性』の 4 つの能力要素を選択し、プロジェクト活動を通して、それぞれ以下の 7 項目により指導してきた。

『発信力』・・・チームで働く力

- ・文献調査や実態調査を正確に理解する。
- ・それぞれで理解したことをチームで議論し、統一した意見にまとめる。
- ・ヒアリング調査において、積極的に意見を述べ、正しいかどうかを確認する。
- ・事例や客観的なデータを用いて、具体的に分かり易く伝える。
- ・聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝える。
- ・自分の意見や判断を相手に分かり易く伝えるために、話そうとすることを自分なりに十分に理解する。
- ・相手の表情、態度を見て、それに応じた話し方をする。
- ・発表の際には、ポイントと話す順序を事前に考えておき、話す。

『傾聴力』・・・チームで働く力

- ・メモを取る際に不明な点をチェックし、後で確認をする。
- ・メモを取り、みんなでそれを確認し、議事録を作成する。
- ・ヒアリング調査の際、相手が分かり易いように事前に質問事項をチームでまとめる。

- ・先入観にとらわれることなく、相手の話を素直に聴くことができる。
- ・ゼミで提出するレポートについてのアドバイスを求められたら、一から説明してもらい、疑問点や明確化すべき点について質問する。
- ・友人から相談事を持ちかけられたら、友人の話をしてできるだけ客観的にとらえ、偽日しい意見であっても伝える。
- ・レポートの分担を決める際、一人の話が長く脱線した際には、発言が長くなる原因を考え、相手の話を要約し、分担の話題に戻す。
- ・相手に積極的に話してもらうには、話題のポイントを話してもらうようにする。

『主体性』・・・前に踏み出す力

- ・演習で、毎回リーダーを交代でやり、その日の学習の先導役を果たす。
- ・ヒアリング項目を率先して提案する。
- ・訪問先で積極的に質問する。事前に準備する。
- ・分担して任された作業が早く終わったので、チームの仲間に見てもらい、さらに良いものにする方法を考える。
- ・作業分担を決めるとき、自分の強みを活かせると思ったら、多少困難な作業でも引き受ける。
- ・発表会で直接関係ない学生の発表を聞きながら、自分の研究への新しい視点を考えてみる。
- ・用事ができてレポートが期日に間に合わないとき、限られた時間で何ができるかを考え、期日にまでにできるよう工夫する。

『計画力』・・・考え抜く力

- ・プロジェクトの内容を理解する。
- ・プロジェクトのスケジュールを作成する。
- ・実行計画書（アクションプラン）を作成する。

- ・グループ研究が思ったように進まない場合、まずは、計画や進捗状況、問題点等を確認する。
- ・テーマに沿った調査を行い、レポートをまとめるには、内容や手順を考え、調査、整理、執筆などを分けて予定を立てる。
- ・調査レポートを作成する場合、期限を考慮し、よいレポートを書くための作業プロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てる。
- ・進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正する。

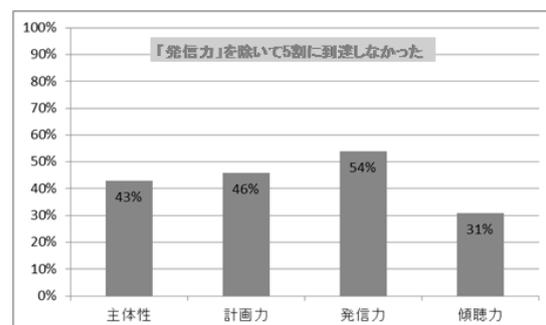
3、プロジェクト活動の効果に関する考察

メンバー4人の各能力要素の達成度を出すために、上記で掲げた4つの能力要素の各7つの項目について、それぞれ、7項目に分け、それぞれ5段階で評価した。

できた「2点」、少しできた「1.5点」、やれた「1点」、できなかった「0.5点」、やってない0点

その結果をグラフにしたものが下記の図であり、残念ながら、「発信力」を除いて、いずれも50点に達しなかった。この点については、3月までに作成する「調査報告書」を完成させるまでに、各能力要素を高めるよう指導している。

4つの能力要素達成率



4.本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

(1)プロジェクトの内容

メンバーの意見等を重視し、新しいテーマを見つけることと、「就業力（社会人基礎力）」のアップを今年度以上に高め、少なくとも6割程度の達成度を目標とする。

(2)プロジェクトの進め方

前半部分は、もう少し「文献研究」をしっかりとやり、ある程度内容を理解したうえで実態調査を進めていきたい。

また、就業力の能力要素も、もう少し増やして進めたい。特に「チームで働く力」に重点を置いて進めていく方針である。

(3)プロジェクト運営の制度

従来通り、ゼミ単位で、ゼミの指導者の専門性を活かすテーマの発掘に努めたい。

iPad、iPhone で利用できるアプリケーション作成

今井正文

1. プロジェクト活動の内容

経営学部では全学年にiPadが無償貸与され、教材として使うだけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などのあらゆる場面に利用されている。また無線 LAN 環境も完備されおり、学内どこからでもインターネットを利用することができる。本プロジェクトは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成を行った。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに、学習ツールとしての効率的な活用について考えながら活動した。

本プロジェクトは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成を行い、アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに学習ツールとしての効率的な活用を考える事を目標として活動した。具体的には、授業での利用を目的とし、テスト問題の製作・配信、解答の機能を備え、学籍番号や名前等の項目表示、キーボード及び手書き文字入力、データベース接続(データ送受信)の機能を有する学習支援アプリの開発を行う事とした。制作方法や開発環境の検討にについては、協力先企業様への企業見学で得た情報や協力先企業様から得たアドバイスを参考にした。なお、協力先企業は、株式会社 インターネットイニシアティブ名古屋支社と株式会社アイエスエルの 2 社様である。最終的には、2 チームに分かれて FileMaker、HTML+CSS+JavaScript、PhoneGap 等を用いて実際に学習支援アプリの制作を行う事を通して、チームによるアプリ開発の基礎を学ぶことができたと考えている。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の3能力12分類の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、iPad の特性を活かした学習支援アプリの作成という制約から、実際にはどのようなアプリを作るのか、どのようにチーム分けするのかあるいは分担するのか、開発を実行するかという活動がある事から、3能力すべてが求められる

本プロジェクトでは、作成するアプリの機能について集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論が必要になる。この段階では、考える力、チームで働くことのできる力が主に必要となる。スキル別、アプリ作成方法別にチーム分けしてからは、考える力、チームで働くことのできる力はもちろんであるが、さらに前に進む力が必須となる。協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰うレベルから、外部である企業とのチーム作業までの発展が目標となる。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる事とし、毎週のミーティング時間の調整と中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術的な質問等があった場合や必要機材・試験環境については出来る限り対応した。見学時の各種の配慮やプロジェクト進行上必要となるライセンス購入、開発したコンテンツの iOS Developer Program のアカウント名義等については相談に応じ、支障の無いよう心がけた。

初期段階の作成するアプリの機能についてはブレインストーミングや図形表現による意見集約法によって集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論に時間をかけていた様子である。会議法については適宜ヒントを与えたが、この段階では、考える力、チームで働くことのできる力ともに様子をうかがいながら各自できていたように見えた。

初期の段階より、プロジェクト進行等も含めて学生に任せため、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階で遅延等、色々あったようだが最終的にはチーム作業を出来ていた様子であったので学生の活動としては評価できると考えている。また、独自アプリケーション開発は2チームに分かれて作業していたが、それぞれのチームにおいて技術的な意味でも相応の学習効果もあったようである。プロジェクト本来のテーマから少し外れるが、メンタルタフネ

ス講座のボードゲームに用の簡単な計算プログラムページ等も同様にアプリにすることが出来ていた点等も評価できるものであると考えている。

以上の点については、学生の活動報告書や評価シートからも各自の達成度には違いがあるもののチームとしての活動はおよそ同様の前向きな評価をしているようである。一方、問題の発見や創造力、実行力では各自反省点を挙げている。これらの項目については、教員としては途中で思いはしたが各チーム作業に追われているようであったので意見収集の場の設定をする事をしなかったが、学生の活動報告から改めて振り返ってみると、担当教員としては反省すべき点である。

対外的な評価については、協力企業からは学生の活動に対して一定の評価を頂けている様子であり、学生自身の印象も興味深いとの意見を頂いた。一方、対外的なスケジュール遅延等については、前に進む力に該当するがまだまだ改善点が多く見受けられる。また、協力企業との関係としては、外部である企業とのチーム作業まで発展できれば理想的であるが、情報提供、意見を貰うレベルから脱していない様子であった。学生のアプリケーション開発に関する知識的技術的な問題でもあるので仕方がない面もあるが、指導教員として今後の課題としたい。

プロジェクト専用アプリの使用に関しては、議事録とファイル管理については使いこなしていた様子であるが、チャットは他のアプリで代用しており、また、タスク管理についてはあまり使いこなせて無い様子であるので改善点としたい。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

プロジェクト活動は、ジェネラルスキル養成の教育プログラムである一方で学生の動機づけの機会と考えているが、できる限り外的要因でなく内的要因を誘発するものになるよう配慮したいと考えている。そのためできる限り教員の関与を意識させないようにしているつもりであるが、関与度合いについては常に悩ましい部分である。

(1) プロジェクト内容について

プロジェクト内容については、上記理由により特定することなく行いたいと考えている。

(2) プロジェクトの進め方について

同様にプロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる方向で対応したい。教員の関与については議論の余地があり、今後も考慮しつつ運営したいと考える。

(3) プロジェクト運営の制度について

制度的なものについては特にない。あえて言えば、3年次の学生の動機づけと達成できる目標については、学生個々の知識的な問題もあり、一考の余地があるように思う。理想としては2年から4年あるいは各学生個々それぞれに実行可能なレベルがあるため、前後に導入的、実践的プロジェクト等があれば、さらなる効果があるように考えられる。

表 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	1 2 の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎ チーム開発では必須 ○ チーム開発では必須 ◎ アプリ開発では必須
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	○ ◎ ○
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレス・コントロール	○ ○ ◎ チーム開発では必須 ○ ○ ◎ 開発では必須

(4)

社会人基礎力

3つの能力	1 2 の能力要素	
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	物事に進んで取り組む力 他人に働きかけ巻き込む力 目標を設定し確実に行動する力
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性	自分の意見をわかりやすく伝える力 相手の意見を丁寧に聴く力 意見の違いや立場の違いを理解する

	状況把握力	力 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレス・コントロール	ストレスの発生源に対応する力

ヨシノパンプロジェクト

加藤 尚子

1. プロジェクト活動の内容

本学に設置されているヨシノパン自動販売機の売上向上に貢献するため、様々な活動を行った。具体的には、AIDMAモデルというモデルをもとに、Attention（注意）及びInterest（興味・関心）を向上させることで、売上向上に貢献する活動である。具体的な取り組み内容は以下のとおりである。

（1）プロジェクト活動開始に向けた活動

①事前調査（学内購買横にあるパン自販機の売れ行きを観察）

②活動内容に関するプレゼンテーション

学生らはプロジェクト対象となる企業に対し、活動協力を求めるため、よしのベイカリー株式会社代表取締役社長の鈴木雅晶氏に本プロジェクトについてのプレゼンテーションを行った（プレゼンテーションの結果、鈴木氏よりプロジェクト活動許可を得ることができた）。

（2）紙面掲示（3号分）に向けた活動

①紙面作成にあたっての複数回にわたるインタビュー

②学生へのアンケート

③パン作り体験（よしのベイカリー株式会社にて）

④紙面作成作業

⑤紙面掲示依頼（学内の3ヵ所：購買横、B14教室横、D棟2階の掲示板に掲示）

（3）Attention及びInterestの変化をとらえる活動

①学内アンケートの実施

学内で学生に対してアンケートを配布した。ア

ンケートは学生一人ひとりに手渡しをし、回答してもらう方法を取り、約1300名の学生（のべ人数）から回答を得ることができた。

②インタビューの実施

協力企業であるよしのベイカリー株式会社代表取締役社長鈴木氏へのインタビューにより、本プロジェクトの売上貢献について確認をした。

（4）結果及び考察

上述したアンケート及びインタビュー結果より、本学学生の学内パン自販機に対する購買行動に変化が見られ、本プロジェクトでの取り組みが売上向上に貢献できた可能性が考えられた。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトにおいては、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ1300名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。これらの取り組みには社会人基礎力の3つの力である「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が必要となる。例えば、学生へのアンケートは直接学生にアンケートを依頼し、回答をしてもらう形を取っている。この行動には「前に踏み出す力」の構成要素である「働きかけ力」、「チームで働く力」の構成要素である「発信力」（アンケート協力依頼）「傾聴力」（アンケート内容以外の生の声を聞く等）「状況把握力」（アンケートに協力してもらえる状況かどうか）「規律性」（依頼時には規律や礼儀が必要）、人によっては「ストレスコントロール力」（アンケート協力依頼、生の声を聞く等）も求められる。さらに300枚、500枚といったアンケート分析に必要な回答枚数を決められた期間に実施するためには

「前に踏み出す力」の構成要素である「実行力」も必要となるのである。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

本プロジェクトでは、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ 1300 名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。

このような活動の中、学生それぞれがそれぞれの時期に力を伸ばす場面がみられた。例えば、ある学生は自分から何かをする姿勢が足りないとこがあったが、プロジェクトが進むにつれ、「自ら動く」力を伸ばしてきた。また、ある学生は社会人基礎力の能力要素のうち「規律性」に欠けていたが、プロジェクトメンバーらでの活動報告書作成が上手くいかずに何度も修正がかけられていた場面において、「前に踏み出す力」を発揮し始めることができていた。

学生たちはお互いの行動を観察しながら、少しずつ自分の力を伸ばしていく力を持っている。ただし、その力を発揮しようと自らが立ち上がる場がなければ発揮しないまま過ごす学生もいるであろう。本プロジェクトは学生自らその力を出そうと頑張ることができる（あるいは頑張らなければならないと状況が思わせる）場であったと考えられる。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

(1) プロジェクト内容について

本プロジェクトでは、協力企業へのプレゼンテーション、インタビュー、紙面作成、のべ 1300 名にもおよぶ学生へのアンケート実施や分析等、多岐にわたる活動に学生たちは取り組んできた。このような取り組みにより、学生自らその力を出そうと頑張ることができる（あるいは頑張らなければならないと状況が思わせる）場を実現できたと考えている。

(2) プロジェクトの進め方および運営制度について

プロジェクトの早い段階から ML を導入、また public フォルダを用いて情報共有を進めた。さらに、後半からは作業報告書を提出する形をとった。さらには当初計画に加え、プロジェクト活動日毎に作業計画書を作成する形をとった。しかし、プロジェクト開始時からこのような形式を採用していなかったため、PDCA サイクルの見直しを学生自ら行うまでには時間がかかったといえる。次年度は、この点について改善していきたい。

また、プロジェクト運営側から、PDCA の Plan の変更が行われたため、学生側にとっては予期せず自分たちの Plan 変更が求められることとなり、当初の計画通りに行かない場面が何度かみられた。この点については次年度改善を望みたい。

(3) 社会人基礎力を発揮するには何が必要か 今回の活動を通じて、社会人基礎力の構成要素を発揮するには、「規律性」と「ストレスコントロール力」が大きな鍵となることがみえてきた。この点については次年度以降の課題としたい。

SOZO ショップ開店・運営プロジェクト

川戸 和英

1. プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは、豊橋市広小路の「コーヒー豆」を販売してきた SOZO ショップを更新し、新たに店舗企画から開店・運営に携わることを目的として、昨年 4 月から取り組んだ。

SOZO ショップを「学生たちが運営するショップ」にするためには、学生たちがそれまで全く体験したことのない「具体的な事業」に取り組むという高いハードルが課せられたことを意味した。そのために学生たちに求められたのは、マーケティングと店舗経営に関する理論と実際の学習、及び具体的な店舗企画を一から開始することの二本立ての取り組みであった。具体的な取り組みは下記のとおりである。

①理論学習：文献購読による知見蓄積

- ・D.シュルツ「統合マーケティング」
- ・E.コトラー「マーケティング 3.0」
- ・野口智雄「店舗戦略ハンドブック」
- ・P.F.ドラッカー「マネジメント」
- ・栗木 契「マーケティングコンセプトを問い直す」

*理論研究は、店舗を企画・開店する際にその知見ベースとなる。店舗企画、運営、マーケティング、コンセプトを柱に学習

②基礎調査：

- ・商店街視察：
-平日・土日の状況、立地、環境
- ・ヒアリング調査・関係性構築
 - a.広小路商店街 1 丁目
 - b.広小路発展会連合会
 - c.愛知県商店街振興組合連合会
 - d.豊橋商工会議所
 - e.ほの国百貨店
 - f.御油どんぐり工房
 - g.豊川 NPO パルク
- ・全学学生アンケート調査実施：
-回収標本数；600、
-設問数；Q1(7),Q2(5),Q3(9),Q4(3)；大小 24 項目

③店舗企画：

- ・店舗内容：販売商品洗出し
- ・開催イベント
- ・仕入れ先洗出し
- ・店舗レイアウト
-ヒアリング先企業、団体からのアドバイスと閉店中の店舗を視察しつつ、具体案企画を進めた

④店舗広報計画：

- ・店名企画
- ・店舗スローガン
- ・広報ツール；看板、店内グッズ、広告、開店イベント、大学提携イベント
- ・スタッフ体制・連絡網整備

⑤店舗運営：共同経営者募集

- ・大学事務局と調整の上、売り上げに基づく一定の報酬を支払うことで、学生との共同経営者を募集する。
- ・条件的にはかなり苦しく、なかなかボランティア的に、かつ学生への指導ができる人材確保を目指す、あと一息。

⑥付随事業：店内整理・清掃

- ・2013 年1月に実施
- ・電飾サインのデザインを店舗名変更に合わせて改訂予定

これらの取り組みにおいて、育成すべき学生たちの資質は、取り組み内容が広範にわたるため3つの能力と 12 の要素すべてに高水準の成果を収めなくてはならないことになる。しかも「学生の店」となるためには、学生たちの自立性が何よりも重要であり、教員としては、自分が主体となって進められないというジレンマを常に感じながら、粘り強く自主性を確立するための環境づくりに取り組んだ。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

上述のように本プロジェクトは、学生たちに産業界から求められる資質のすべてを育成するには、実際は、学生たちにとってはかなり高いハードルが待ち受けていることでもある。

①社会人基礎力：

「学生の店」といっても、学生は社会人でなければならぬことが当然である。この力がなくては店舗企画を進めることができない。個別に見てみると、まずは「前に踏み出す力」の3要素、主体性、働きかける力、実行力が、「学生の店」にするための基本中の基本となる。やるべきことは何か、言われなくても議論の中から学生たちが組み立てられるようになることが求められる。

また就業力は、自ら就業する力ない限り「店舗企画・運営」は成り立たない。その力をプロジェクトというカリキュラムの中でどう養成してゆくのかは、相当難しいかだいである。

②職業観：

店舗企画・運営は、そして特に店舗企画は「考え抜く力」の課題発見力、計画力、創造力なしに成し得ない。一から店舗を立ち上げるには、豊かな考え抜く力を「粘り強く」持ち続けることが必要である。それだけでなくとも基礎力が圧倒的に不足している学生たちに取り組ませるには、より強い指導力が求められる。

またチームで働く力は、店舗に限らず、現在の学生たちに大きく不足している能力である。チームや外部の人たちの声をよく聞き、それを基にチームで店舗内容を構築するためには、チーム力が決め手となる。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は、メンバー4名に、夏休み直前に五味ゼミから1名の参加希望者があり、合計5名で取り組んだ。

とはいえ、5名の学生とも、店舗企画をどのように進めるべきかが全く理解できておらず、理論学習＝文献購読と実際の企画・設計を指導教員の指導のもと、一から進めざるを得なかった。プロジェクト演習と専門ゼミナールをセットとして、精力的に取り組んだ。幸い本プロジェクトのメンバーは、積極性を十分持ち合わせていて、参加するよう促さずとも、また文献購読についても、教員から言われなくとも自主的に取り

組むパワーを持っていたため、プロジェクトを重ねるうちに次第に能力を身に着けることができたといえる。開店告知ポスターの企画に取り組んだ時も、モチベーションが高められたこともあって、想像以上の力作を作り上げることができた。

そして、店舗概要が見えてくるに従って、学生たちを、を店長、総務・経理、仕入れ、マネジメント、広報の5つの業務担当に振り分けてから、各自の遂行すべき任務について、自覚とモチベーションが高まっていった。学生たちの所見を見ても、最初は何をどうしていいかわからなかったものが、次第にメンバーの性格や役割を見ながら、自らの進めることを自覚していったように思われる。

更に、学生たちに刺激となったのが、商工会議所はじめ、連携先の実業者たちとの接触であり、このことも実社会の風に触れることができ、モチベーション向上に寄与することができたといえる。

とはいえ、一口に店舗といっても、まだわからないことが多く、夫々の活動について、順序立てて計画を立てたり、夫々の計画立案をどう進めるかについて積極的に課題を抽出したりということはなかなか進んでいないのが実情である。やるべきことは何か、その次は何をやるのかを計画し実行に移すには、まだまだ訓練が必要だと思われる。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本プロジェクト活動は、ジェネラルスキル養成の教育プログラムであるだけでなく、店舗の企画・運営というきわめて実践的な能力を養成しないと進めることができないプロジェクトでもある。これらの観点から、各プロジェクトを考察した結果を踏まえて、改善点や来年度の課題、そのための提言などを提起してみる。

(1) プロジェクト内容について

本プロジェクトは、ビジネス実践のプロジェクトである。現在3月開店に向けて店舗設計が大詰めを迎えている。

来年度は開店した店舗の円滑な運営体制を確立するとともに、当初の店舗から更に発展させる課題が、プロジェクト実践の柱となる。

ショップは、金、土、日の3日間営業で、地元の食品販売と、試食コーナー併設、及び不定期なイベントなどを織り込んだ「人の集まるスペース」を目指している。その店舗の売り上げと品揃えの拡大、イベント開発など、常に発展させていく必要がある。従って、それらの課題に取り組むために、来年度の4年生と新たな3年生の協力が必要となる。

(2) プロジェクトの進め方について

新3年生には店舗運営のための理論学習と実行能力養成がまず求められる。言い換えれば、まずは社会人基礎力と就業力を向上させることである。

4年生については、店舗運営円滑に進め、さらなる店舗発展のための計画力、創造力、傾聴力、状況把握力、柔軟性が求められる。折しも就活時期でもあり、

就活にこのプロジェクト体験が生かせればと期待している。

(3) プロジェクト運営の制度について

このように、SOZO ショッププロジェクトは、3年生と4年生の協力体制を築くことが最大の課題となる。そのためには、営業中の店舗で担当業務を有効にシェアして、3年生も4年生もそれぞれが3つの力と12の要素を向上させるような制度を構築する必要がある。役割分担をどう進めるかがカギとなろう。

豊橋エコタウンプロジェクト

～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

見目喜重

1. プロジェクト活動の内容

太陽光発電の大量普及とともに、システムの長期信頼性が問題となっている。本プロジェクトでは、豊橋市内小中学校に設置されたシステムの稼働状況を調査し、故障の有無、年間発電量を調べることで、システムの長期信頼性評価の基礎となる情報を収集する。また、環境教育の現状を聞き取り調査し、各校に設置された太陽光発電システムを活用した環境教育コンテンツの開発を検討するための基本情報とする。

一連の活動を通して、就業力を育成するとともに、エネルギー・環境問題に関する基礎知識を習得する。また、現場を見ることにより、自身のエネルギー・環境問題への認識を深める。

プロジェクトの実施にあたっては、以下のような作業を行う必要がある。

- ・豊橋市教育委員会への調査実施の依頼
- ・各小中学校への調査実施の依頼
- ・訪問調査の担当校の分担
- ・日程調整
(電話により、担当者と日時を調整)
- ・調査項目の検討
- ・訪問調査の実施
- ・各小中学校への調査協力のお礼(お礼状の送付)
- ・調査情報のとりまとめと分析
- ・報告書の作成
- ・調査結果の報告(豊橋市教育委員会)

なお、本プロジェクトは前年度からの継続プロジェクトである。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本事業では、社会人基礎力(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力)の育成が求められている。

これらの力の育成に対して、本プロジェクトでは次

のような効果を想定している。

(1) 前に踏み出す力

各自が調査分担校と日程調整を行い、訪問調査を実施することで、主体性・実行力を育成する。

(2) 考え抜く力

訪問調査の結果から、現状とその問題点を考察することで、課題発見力と創造力を育成する。

また、調査校の予定、各自の受講スケジュール、プロジェクトのスケジュールを念頭に入れて、効率的に訪問調査を実施しなければならない。このことから、計画力を育成する。

(3) チームで働く力

各小中学校の担当者によって太陽光発電システムに関する知識は大きく異なる。こうした状況で、調査の際に自分が何を聞きたいのかを相手にわかりやすく伝える必要が重要である。ここでは、発信力が必要となる。また、相手の意見を丁寧に聞き出すことにより、傾聴力を育成する。

訪問調査の実施にあたっては、決められた日時に訪問することは絶対である。また、調査結果のとりまとめ、報告書の作成などグループでの作業には、やはり日時を決めて作業を協働で進める必要がある。こうした活動を通し、規律性が育成できる。

これまでに実際に自身で日程調整をし、また訪問を行うという行動をしたことがない学生にとって、これらの作業を行うことは非常に大きなストレスである。こうしたことから、ストレスコントロールが育成できる。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は、市内小中学校の全74校を訪問し調査を実施した。これにより、実行力、主体性、計画力の育成には効果があったのではないと思われる。

また、訪問調査によって計画していた情報を収集で

きており、こうした結果を見ると発信力・傾聴力の育成にもそれなりの寄与があったと思われる。

さらに、訪問調査にあたり、日程調整の困難さ、訪問時の様々なプレッシャーを経験したことで、ストレスコントロールの育成も行えたと思われる。

一方で、得られた情報の十分な分析は行えていない。より高度・専門的な分析を大学生としては求められるべきであるが、そのための基礎知識や実施時間に十分な余裕をとることができなかつた。こうしたことから、課題発見力、創造力については十分に育成することができなかつたように思われる。

また、規律性については、例えば訪問調査ではしっかりと守られたとしても、日常生活にそれが反映されているとは必ずしも言い切れない。学生が状況に合わせて使い分ける面があり、そうした意味では必ずしも身につけているとは言い難い。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本事業は、学生の就業力を大学教育だけではなく、地域（企業）の協力を得ながら育成することを目的としている。しかし、地域からの協力を得るためには、その前提条件として、地域社会に貢献し、信頼関係を築くことが必要である。

大学の地域貢献は、本来は、地域への文化の発信（研究、教育、その他の活動）、人材の育成・輩出である。一方で、必ずしも良いことではないが、地域はまずは無償の労働力を求めているという現実もある。

こうしたことから、次年度以降の本事業のあり方について、以下のようなことを検討課題としてあげた。

(1) プロジェクトへの取組姿勢

プロジェクトの計画・実施にあたっては、地域貢献、地域からの信頼を得ることを念頭に活動する。信頼がなければ、地域社会の協力は得られない。

(2) プロジェクトの継続性

継続を念頭に、プロジェクト活動を立案・計画・実践する。折角構築した協力関係を維持できなければ、信頼も失う。

そのためには、上位学年と下位学年との交流が不可欠である。この交流によって、学生主導でプロジェクトを進めることも実現できる。

(3) プロジェクトのテーマ設定

地域の協力を得るには、地域のニーズと本学（学部）の強みが上手くマッチするテーマを探し出すことも重要である。すなわち、本学部の強みである「経営学の基礎」と「ICTの活用」が結びつくようなテーマを探し出すことが重要である。

しかしながら、これは非常にむずかしいことである。

そのため、いろいろなテーマを設定して活動し、上手くマッチングしたら、そのテーマを継続するということも必要である。

また、イベント参加型のプロジェクトもある程度必要であると思われる。当初はボランティア化する恐れもあるが、活動を続けることで、ボランティアからの脱皮を図る。テーマによっては、学部の枠組みを超えたプロジェクトへの発展も考えられる。

(4) プロジェクトの実施体制

プロジェクトのテーマの継続性という観点からは専門ゼミナール主体が望まれる。上位学年と下位学年との交流をよりスムーズに行うことが期待できるためである。

一方で、イベント参加型のプロジェクトや、プロジェクトの発展性を考えると、専門ゼミナールの枠組みを超えた組織での活動も考えられる。

(5) 本プロジェクトの次年度以降の取組

本プロジェクトは、長期的には研究成果の発信という形での社会貢献を目指している。また、環境教育コンテンツが構築できれば、地元小中学校の教育活動への貢献という形で、より近い地域貢献を実現できる。

これまでの2年間の活動を通して、いくつかの小中学校とは意見交換がスムーズに行える環境を構築できている。

次年度以降も継続して取り組み、関係を深めることでより大きな目標の実現に向けて進める予定である。

表1 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎ ○ ◎
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	◎ ◎ ◎
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレス・コントロール	◎ ◎ ○ ○ ◎ ◎

1. プロジェクト活動の内容

診療情報管理士認定試験(以下、認定試験)合格を目的に、学内を対象とした自主勉強会の企画運営、学内外を対象とした診療情報管理士認定試験対策講座(以下、対策講座)の企画運営および宣伝活動、診療情報管理士のデジタル問題集の作成を行なった。

昨年度との大きな違いは、以下の通りである。

1) 自主勉強会の企画運営

共同学習による効果をねらい、一昨年度まで実施していたが、昨年度は学内受験者が2名と少なかったため共同学習による効果があまり期待できず、学生と相談の上実施しなかった。今年度は学内受験者が5名となり、共同学習による効果が期待できたので、学生と相談の上実施することとした。

2) 対策講座の企画運営および宣伝活動

昨年度は、講師や学外受講者との連絡や調整を担当教員が行ったが、今年度は学生と相談の上、学生が行うこととした。学生指導やフォローアップのため、学外に公開するメールアドレスはメーリングリストを用いて送受信内容を共有できるようにした。FAXについても、受信FAXがPDF形式でメール配信されるサービスを利用し、メーリングリストに配信されるようにすることで、共有できるようにした。

近隣で関連学会が開催されていたため、昨年度のプロジェクト内容を報告し、学会参加者との意見交換や宣伝活動も行った。

運営費(講師費用等)に充てていた補助金が昨年度で終了したため、今年度から参加費を受講者から徴収し、運

営費に充てることにした。プロジェクトメンバーのモチベーション向上や学内受講者の費用負担軽減を目的に、学外受講者の参加費合計が運営費を上回った場合は、学内受講者の参加費を無料とする枠組みも構築した。

3) 診療情報管理士のデジタル問題集の作成

作問学習による効果をねらい、学生と相談の上、診療情報管理士のデジタル問題集を作成することにした。ベースとなるアプリケーションを学生が企画・開発・運営するのは困難であったため、企画・開発・運営は担当教員が担当し、学生はコンテンツ作りを担当することになった。作問へのモチベーションや地域貢献、運営費用、問題数の確保、著作権問題の回避、診療情報管理士の学習環境の確保などの面から、1問作問する事に1回模擬試験が受けられ、学外の人でも無償で利用できるブレンディッドラーニングも視野に入れたCBTシステムとした。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本プロジェクトでは、学生の就業力および社会人基礎力養成という大きな目標を達成するため、「主体性」「社会人スキル」「メンタルタフネス」を育む指導を行った。また、大学の存在意義の一つである「地域貢献」が行え、本学が抱える課題の一つである「知名度の向上」も可能な内容とした。具体的には、以下の通りである。

1) 主体性

プロジェクトのテーマをプロジェクトメンバー自身に考えさせるようにした。時間的な制約上、一から考えさせることは困

難であったので、教員側でテーマを五つ用意し、プロジェクトメンバーに選ばせた。テーマはプロジェクトメンバーのメリットにもなるものとし、モチベーションが高まるようにした。例えば、プロジェクトメンバーが認定試験に合格することを目標としていたため、合格率の向上にも繋がる対策講座の実施を内容に取り入れた。

プロジェクト運営中は適宜必要なキーワードを与え、具体的な内容はプロジェクトメンバー自身に考えさせるようにした。また、学内の教職員をプロジェクトメンバーに紹介することで、プロジェクトメンバーが学内で主体的に動ける環境を構築した。

2) 社会人スキル

対外的な文章の書き方や連絡の取り方、イベントの企画運営方法、報連相などを、プロジェクト運営を通して自然と見につけられるような指導を行った。また、プロジェクトがPDCAに則って行われているかも、適宜確認した。

3) メンタルタフネス

学生のメンタルタフネス育成には、成功体験と失敗後のリカバリー体験が有効であると考えている。教員が提示した課題は地道に行えば必ず成功するものとし、プロジェクトメンバーが考えた課題は失敗する流れであってもしばらく様子を見て、大きな失敗になる前にフォローするようにした。

4) 地域貢献

連携先団体にもメリットがある内容とした。例えば、対策講座や「診療情報管理士のデジタル問題集」を学外に公開することで、地域のニーズに応えられるようにした。

5) 知名度の向上

大学の知名度を向上させる内容を取り入れた。例えば、近隣の医療機関に対

策講座の案内を発送し、インターネットのWebサイトやブログで告知することで、診療情報管理士に興味がある人達に、本学を知ってもらえるようにした。「診療情報管理士のデジタル問題集」も、診療情報管理士関連 ML や学会で宣伝活動を行った。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

プロジェクトメンバーは昨年度よりも増えたものの、新たな取り組みが増えたことから、各プロジェクトメンバーの負担も大きかったようであるが、プロジェクトの終盤では期待以上の働きをしてもらえるようになった。

プロジェクト活動成果発表会は、残念ながら表彰されなかった。本プロジェクトは認定試験の合格発表が行なわれる3月末まで実施されるため、プレゼン資料にあまり力を入れる余裕が無かったこと、発表会の評価基準が不明瞭であったため専門性の高い取り組みが評価されにくかったことなどが要因として考えられる。プロジェクト演習という授業の目的は、成果発表会の評価ではないことをプロジェクトメンバーに正しく理解させ、社会人に必要なスキルを高める指導を今後も継続して行っていきたい。

対策講座の学外受講者は18名程度と、知名度を向上させ、地域貢献することもできた。今年度から参加費(全15回の講座で2万円)を徴収して運営費に充てることとしたため、昨年度より学外受講者が減ることが予想されたが、プロジェクトメンバーの頑張りにより、昨年度と同程度の学外受講者を集めることができた。一般的に、大学の教育目的で実施するプロジェクトは連携団体の負担が大きく、WIN-WIN の関係をつくれなことが多いが、本プロジェクトにおいては WIN-WIN の関係が構築できたと評価できる。九州地方や中国四国地方からも受講者を集めることができたのは、大きな収穫であった。

昨年度のプロジェクトの成果を、昨年度のプロジェクトメンバーである学生が日本診療情報

管理学会で発表したところ、学会参加者から多くの問い合わせがあり、新たな繋がりも生まれた。発表学生のモチベーションも高まったようである。

本プロジェクトは、3月末に行われる認定試験の合格発表後、受講生にアンケートを実施し、集計・検証を行って終了となる。本報告には間に合わないので、本プロジェクトの成果は今後も学会等で広く伝えていく予定である。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

他のプロジェクトに参加しているゼミ生がいたので、専門ゼミナールおよびプロジェクト演習の運営に支障がない様に、他のプロジェクトを運営している教員と実施時間などの調整を行った。専門ゼミナールとプロジェクト演習の線引きや、プロジェクト演習の運営体制(テーマありきか教員ありきか、ゼミ単位なのか、主目的は何か、地域のニーズと学生の主体性のどちらが優先か、など)を早急に決める必要がある。

プロジェクト演習を進める中で、大学側都合で何度か計画が変更になり、PDCAについて学生を混乱させる場面が多々生じた。次年度以降は全体的な Plan は変更しないでいただきたい。

プロジェクト自体は良い取組みであるが、経営学部には診療情報管理士関連のカリキュラムが無いため、今年度をもって終了する。

1. プロジェクト活動の内容

田原市の風力発電の現況と将来について調べる。特に、風力発電システムの電力供給に関して考察し、そのメリットとデメリットを検討する。その際、① 震災と原発事故に繋げる、② 世界に繋げる、③ 丁寧なコストベネフィット分析を目標に据えた。

今年は、テーマ設定からリサーチプランの作成まで、できるだけ多くを学生に委ねた。結果として、試行錯誤の連続となった。テーマに関しては、トヨタの環境技術から有楽製菓の企業インタビューへ変遷した後、このテーマに落ち着いた。枠組みの作成やリサーチの組織に際しても、助言だけではなく、担当教員が手を加えるケースが多くなった。

2. 育成すべき資質への教育効果

学生が、共同作業を通して学ぶことをそれなりに楽しんでいった点が良いと思う。田原市役所の人々が丁寧に対応して下さったこともあり、時間が経つにつれ、自分たちで自然に作業を行う傾向が見られるようになった。こうした活動は、確かにこれまでの教育に欠けていた点かと思う。

3-4. 効果に関する考察と次年度以降の進め方

- ① 学生が日ごろから新聞などに接していないため、情報のインプットに欠ける。結果と

して、枠組みの設定や個別リサーチテーマの特定が、自立的に進んで行かない。

- ② グループ作業のため、参加者(4人)全員の関心が一致するテーマを選択することが困難。関心のない学生には、初めから妥協を強いることになる。
- ③ われわれのゼミでは、今年はプロジェクト演習とゼミナールを分離す形式に変更した。ゼミナールの時間がプロジェクト演習に援用される場合、個人作業ベースの専門科目の学習時間が大方消失してしまう。大半の学生にとっては構わないかも知れないが、知的好奇心と創造性のある少数の学生には、大きなマイナスとなるかも知れない。
- ④ プロジェクト組織は多様で良いと思うが、学部3年次での設定にもかかわらず、社会科学のリサーチの基礎を学ぶ形態からは程遠い。つまり、対外折衝に重心が置かれ過ぎている。
- ⑤ 上記④に関係して、昨年からは違和感を感じているのだが、異なる目的と方法を用いた活動(そうなるよう奨励すべきだが)の成果を投票で選ぶのは、民主主義ではなく、衆愚主義だと思う。良いライバルリー存在は学生を伸ばすが、競争主義的な教育方法には賛成しない。

プロジェクトを、その内容と方法によりカテゴリー化し、複数教員が指導すれば、学生の希望の反映と減少する学生数への双方に対処できると思う。14年度までに、新たな枠組みを工夫する必要がある。

1. プロジェクト概要

野口ゼミナールでは、大学が位置する豊橋市への地域貢献を行うことを目的として活動を開始した。まず、豊橋市の特徴を調べてみたところ、前期高齢者と後期高齢者を合わせた高齢者割合が、愛知県で3番目に高いことが明らかになった。次いで、豊橋市に在住する高齢者のために何が出来るか検討した。インターネットを中心として、種々の社会的な問題を列挙し、検討したところ、近年オレオレ詐欺が増加傾向であり、かつその検挙率が低下していることが明らかになった。そこで、活動の実現可能性等も踏まえ、豊橋市からオレオレ詐欺を撲滅することをプロジェクトの目的とした。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

豊橋創造大学が取り組むプロジェクト活動の目的は、メンタル面・スキル面の強さを備えた職業人育成であった。これが何を意味するか検討した結果、野口ゼミナールでは、「社会人に不可欠な能力の具備」と結論付けた。加えて、社会で求められることは何かという検討を重ねた結果、『社会貢献能力』を養うことを野口プロジェクトの意図とした。

さらにプロジェクトの実施に際して、重視したことは、ゼミ生の自主性を育成することであった。そのため、教員としての介入をできる限り避けようと注意した。教員の活動になってはいけないからである。

そのため、紆余曲折は所与のものとして受け入れていた。しかしながら、活動当初は特に、ゼミ生に過度に多くの意見や指導を求められるなどした。その際は、ゼミ内で話し合いを持ち、その時の司会をゼミ生で順番に回すなどした。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

プロジェクトのテーマ選定に始まり、12月の活動報告に至るまでにおいて、ゼミ生は大きく成長した。当初は、教員に助けを求めることが非常に多かった。たとえば、テーマ選定や豊橋信用金庫様とのアポイントを採る際は、教員が多く介入せざるを得なかった。

しかしながら、夏以降、特に10月あたりから老人クラブを訪問するようになってからは、成長が顕著に見られた。ある老人クラブに訪問し、そこで別の老人クラブの訪問日を自身で決めてきたり、老人クラブの代表者の連絡先を教えてもらい、自ら訪問するなど、積極性が生まれた。

プロジェクト活動報告についても、スライドに工夫を凝らしたり、発表の練習を何度もするなど、努力を積み重ねることができたことは評価に値する。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

本年度のプロジェクトの結果、明らかになった問題点に、「責任と役割の極度な集中」を挙げることができる。すなわち、3人のゼミ生による活動であったため、各自が責任感を持ち、それぞれ役割分担を行って活動を行う必要があった。しかしながら、実際には、一人の優秀な学生に依存という傾向が時折観察された。当初から責任と役割が特定のゼミ生に集中することは予想されていた。その中で、役割を分担するなどの対策は採ったが、最終的な責任と役割は常にその特定のゼミ生に帰属していたように思われる。

原因は、個人の能力がかけ離れていたこと、および過度に少人数のプロジェクト活動であったことにあると思われる。良くも悪くも、ゼミ内におけるゼミ生の能力が近ければ、このような問題

は起きないし、メンバーが多ければこのような問題は起きづらいと考えられる。そのため、プロジェクトをどの単位(ゼミ単位もしくは全く別のグループを組織するかなど)で行うかについての再考が必要であるかと思われる。

加えて、もう1点問題を挙げるとすれば、プロジェクトにアカデミックの要素が少なかった点にある。これは大学教育という観点からすれば問題として捉えるべきである。これについては、次年度以降テーマ選定の段階から考慮したい。

豊橋トップインタビュー2012プロジェクト

三好哲也

1. プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは、豊橋にある企業のトップに経営方針や経営ビジョンをインタビューしそれをWEBページまとめることを目的としている。企業が求める人材についても合わせて伺い、自らの就業に対する考え方をまとめる。トップインタビューを行うために、以下の作業をメンバーと分担して処理しなければならない。

- 訪問企業の選定
- インタビューの依頼とその可否の確認（手紙、メール、電話による調整）
- 日程調整（手紙、メール、電話による調整）
- インタビュー内容の検討・企業についての調査
- インタビュー当日の準備（持参物や役割分担など）
- インタビュー協力のお礼
- 写真、記録、音声データの整理
- 報告書の作成（用紙とWEB）
- 校閲依頼
- 全体のスケジュール管理
- 業務分担の決定と日程調整

これらの処理をインタビュー対象ごとに効率よく、メンバーで話し合いながら進めなければならない。

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は、産業界から求められる資質として社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている。本プロジェクトでのどのような場面や業務の中で、これらの資質養成がなされているか考察する。

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の3能力12分類の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは1節にまとめたように、インタビュー対象の決定やインタビュー内容の決定などの計画部分では、「考えぬく力」と「チームで働く力」が求められる。また、計画が策定され後にそれをこなすために、「前に踏み出す力」と「チームで働く力」が求められる。作業の困難性や複雑性によって、対処方法をチームで共有しながら進めなければならない。

本プロジェクトでは、事業の企画やインタビュー遂行

にあたって対立するような意見は少なく、それぞれが役割分担してその役割を十分果たすことが多い。役割分担を決めた後の活動では、各自が分担する作業を責任持つて行うことが、全体のプロジェクト推進につながる。そのため、「働きかけ力」、他者との意見調整ができる「柔軟性」などについては、他の能力に比べてそれほど高度に求められることは少ない。ただし、実際のインタビューでは、それぞれの役割を踏まえて、インタビューアのフォローアップやインタビューの流れを理解した対応が必要であり、「働きかけ力」や「柔軟性」を意識する場面も多い。また、プロジェクトの内容がインタビューであるため、傾聴力は、必須であり、聞いた内容を整理しながら傾聴し、随時レスポンスが必要である。このことも繰り返しながら養成できる。

企業選定などの時間が掛かるために、インタビュー活動は9月以降に実施される。そのため、複数のインタビューの準備が、重複することもあり、スケジュール管理を確実にやり、準備処理を進めなければならない。なれない作業が多く、また、企業人との対応が必要である。学生にとってはストレスを感じる作業が続くが、継続して繰り返し活動することにより、対処方法を体得できるようである。このように、インタビューを複数回（5回）のインタビューを計画して実施し、それを取りまとめる活動では、社会人基礎力のすべてを発揮する場面が多く繰り返して含まれている。そのため、プロジェクトへ積極的に参加すれば、そのような場面に遭遇して体験できることになっている。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

本年度は、メンバーが1名であり、指導教員とのミーティングで、実行計画を策定し実施した。マンパワーの不足のため、5つの企業のインタビューを計画指定いたが、3回のインタビューを行った。インタビューには昨年度経験した4年生の協力を得た。ワルツ株式会社のインタビューでは4年生の都合により協力者が1名のために、教員もインタビューに付き添うことになった。メンバーが1名であったため、すべての活動を1名の学生で処理を行った。学生の繰り返しいろいろな業務に接すること

ができたため、企業で就業において最低必要とされる能力について、理解できたと思われる。

「前に踏み出す力」を養成できたかについて考察する。他のメンバがいないために、先輩の情報を元に自ら計画、実行する環境であったため、主体的にせざるを得ない環境であり、学生にとっては、体験的に学習ができたと思われる。その中で、メンバー不足のため、働きかけ力については、先輩への依頼などを除いて、不足していたと思われる。

「考えぬく力」を養成できたかについて考察する。活動目的や活動内容を学生自身に実行させたが、本プロジェクトは昨年度プロジェクトの継続であるため、前年を参考に進めたところも多く、その意味で「課題発見力」の養成においては、体験する部分が少なかったかもしれない。計画力、創造力では、新しい自ら興味を持てる企業を選好する作業においては、種々の情報収集から意思決定していたようなので、一定の経験はできたのではないと思われる。

「チームで働く力」を養成できたかについて考察する。先にも述べたようにメンバーが少なく、グループ内での協議する場面が少なく、また、ミーティングでは、教員と1対1の場合が多く、学生自身が他者との協調の中で意思決定や意見調整をする場面が少ない状況であった。そのため、教員に依存する場面も多く、学生自身が主体的に取り込みにくい環境であったと思われる。インタビューを行う中で、他者の意見を傾聴する場面は多く、その傾聴内容に即して質問もせざるを得ないので、発信力や傾聴力など、緊張した状況で行うことも多く、一定の経験はできていると思われる。また、規律性や、ストレスコントロールについての経験も踏まえている。ただし、メンバー間の協議など仲間と意見を調整する場面は少なく、この点は運営方法などを含めて改善すべきである。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

プロジェクト活動は、ジェネラルスキル養成の教育プログラムである。併せて専門教育への導入などの位置づけにもされているプロジェクトもある。これらの観点から、各プロジェクトを考察した結果を踏まえて、運営方法や指導方法の改善点や改良点について考察する。

(1) プロジェクト内容について

前節で考察したように、本プロジェクトは、ビジネス社会で対処すべき事項が多く含まれている。学生が直接企業にコンタクトする場面も含まれており、養成しようとする社会人基礎力の要素能力の育成の場面も多い。学生の希望があれば、継続的に実施する。

(2) プロジェクトの進め方について

メンバーが極端に少ないと、すべての作業を1人で処理しなければならず、学生の負担が増加する。学生の対応力によっては、インタビューの回数が減少する可能性もある。また、他者との調整や意見交換が行えないので、本プロジェクトを実施する場合は一定人数の参加者を確保が必要である。

(3) 参加メンバーの対応力

地元有力企業へ直接学生が接する機会であり、キャリア教育の意味でも重要である。一方で、企業の大学のイメージを直接決めかねない状況が考えられるので、対応出来る学生を選出してインタビューを実施する必要がある。

以上のように、運営上の対応について考察した。

表 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	◎ ○ ◎
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	△ 作業手順は事前にわかっている ◎ ◎
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレス・コントロール	◎ インタビューでは必須 ◎ インタビューでは必須 ○ ○ ◎ ◎ 作業が混みあった時の対象方法

のんほいパーク盛り上げ隊プロジェクト

三輪 多恵子

1. プロジェクト活動の内容

本プロジェクトでは、豊橋総合動植物公園（通称のんほいパーク）について、主に Web を通じて様々な情報を発信することで、活性化を図る目的で活動を行った。

のんほいパークは、日本でも珍しい市営の動植物公園である。パークには自然史博物館や遊園地等が併設されている他、駐車場が無料、入場料が安価（大人 600 円）、等の優位な点が数多くあるにも関わらず、知名度が低く、地味な印象を受ける施設である。

プロジェクトメンバー同士で意見を出し合い、「どのような情報を発信すれば、パークに興味を持ってもらえるか」という観点で活動を開始し、その後、「Web でこのような情報を発信すれば、来園者にとって便利ではないか？」という形に発想を広げ、近隣の飲食店を含めた大規模な取組へと発展した。

具体的な活動は、以下の通りである。また、表 1 に本プロジェクトの全体スケジュールを示す。

(1) 関連情報の収集

国内には数多くの動物園があり、それらの施設がどのような情報を発信しているか、主に Web サイトを中心に調査を行った。その後、「のんほいパークの Web サイトに足りない情報は何か」等を議論し、後述の Web サイトの設計を行った。

(2) 施設見学・事前準備

パークの方へ本プロジェクトの主旨を説明すると共に、パーク内の施設や動物の展示方法等について事前調査を行った。調査後に、積極的に外部に発信すべき点、情報発信の頻度、などの今後の活動の方針を決定した。

(3) Web サイトの開設

「見て楽しい」「見ておくと便利」をコンセプトとして、Web サイトの設計・開設を行った。主なターゲットを“子供のいる若い母親”に設定し、イラストや写真を多用して、見る人を楽しませることのできるサイトを目指してデザインを行った。

(4) インタビュー

Web で発信する情報の収集を目的として、以下の方々へのインタビューを行った。

表 1 全体スケジュール

内 容	
5月	・計画 ・情報収集 (Web)
6月	・施設見学 (27, 28 日)
7月	・インタビュー計画
8月	・飼育担当者インタビュー①② (パトエリア, 極地エリア) ・みどりの協会インタビュー① (売店、オリジナル商品、等) ・近隣店舗インタビュー① (うどん勢川) ※※ 中間報告会 ※※
9月	・シール制作 ・パネル制作 ⇒ 学園祭準備 ・写真展準備
10月	・飼育担当者インタビュー③ (なかよし牧場) ・近隣店舗インタビュー②③④⑤ (Loquat、福ちゃん、ぼてこ、 うずらプリン) ・学園祭における広報活動
11月	・飼育担当者インタビュー④ (郷土の動物) ・みどりの協会インタビュー② (売店、オリジナル商品、等) ・近隣店舗インタビュー⑥ (サークルK)
12月	※※ 成果報告会 ※※
1月	

① 飼育担当者

動物の裏話、活動時間帯、等の「来園前に知っておくと、より楽しい情報」を収集。

② みどりの協会 (売店運営)

パーク内売店で取り扱っているオリジナル商品、売れ筋商品、等の情報を収集。

③ 近隣飲食店

近隣の飲食店について、駐車場の有無、お勧めメニュー、等の情報を収集。

④ コンビニエンスストア

近隣のコンビニ (前売り券を発売している場所) について、情報を収集。

(5) その他の広報活動

学園祭において、パネル展示、写真展示、チラシ配布、等の広報活動を行った。

これらの活動を通して、主に以下の項目について理解を深めるとともに、コンテンツ制作のための様々な知識・技術を習得することとした。

- タスク管理、スケジュール管理
- 共同作業、役割分担、計画
- インタビュー内容の検討、事前調査
- Web サイトの設計、作成、管理
- イラスト、写真素材の作成

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は、産業界から求められる資質として、社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている。本プロジェクトにおける活動の場面、どのように資質が養成されるかを、以下に説明する。

社会人基礎力では、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力、の3能力（12分類）の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、既に一定の広報活動がなされている“のんほいパーク”について、他施設のWebサイト等と比較することで、不足している情報、広報活動の課題点等を見つけ出し、その改善に向けて取り組むことから、『考え抜く力——特に“課題発見力”、“創造力”』が必要となる。

表2 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト外実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性	◎物事に進んで取り組む
	働きかけ力	○
	実行力	◎目標を設定し実現する
考えぬく力	課題発見力	◎現状を分析し、問題点を発見
	計画力	◎具体的な計画立案
	創造力	◎課題解決策を見つける
チームで働く力	発信力	◎インタビュー
	傾聴力	◎インタビュー
	柔軟性	○
	状況把握力	◎作業全体の状況を把握する
	規律性	◎連絡・報告・記録を遂行する
	ストレス・コントロール	○

また、情報発信のためのコンテンツ制作においては、各学生の技術力に依存する部分が多いため、計画の具体化・実現に向けては、『チームで働く力——“状況把握力”、“規律性”』、『前に踏み出す力——“主体性”』が必要である。さらに、継続的なWebサイトの運営や、定期的な情報発信のためには、『考え抜く力——“計画力”、“実行力”』等が不可欠である。

また、今回のプロジェクトの性質上、外部との接触（インタビュー、取材）が非常に多く、学生は多少のストレスを感じていたように見えたが、メンバー同士で助け合い、上手く気持ちを切り替えていたようである。

表2に、本プロジェクトにおける体験項目をまとめる。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

(1) 関連情報の収集

プロジェクト開始に先立ち、様々な動物園のWebサイトを調査することで、のんほいパークWebサイトの課題を明らかにした。Webゲーム等のお遊び的な要素や、Webアルバム、ムービー等が充実しているサイトが多い中、のんほいパークWebサイトの“地味さ”、“情報量の少なさ”を指摘する学生が多かった。

一方で、ICTスキルのある学生は、Webゲームの構築や動画編集、等にはそれなりのコストが必要であることを把握しており、一定の議論の後、市営の施設には資金面で限界があることをメンバー全員で理解するに至った。また、自分達が活動できる範囲にも（スキル、設備の面で）制約があることを認識し、その後の具体的な計画へと行動を移すことができた。

これらの点から、『考え抜く力』について、能力の高い学生を中心に、程度の差はあるものの、メンバー全員が身に付けることができたと考えている。

(2) 施設見学・事前準備

具体的な活動に入る前に、パーク事務局にて事務長補佐の寺部氏に活動の主旨について説明すると共に、協力を依頼した。また、その後、パーク内を見学させて頂き、どのような情報を発信していくか、どのような情報が必要か、等を議論するための調査を行った。

意識の高い学生は、特に何も指示しなくても、積極的にメモを取ったり、写真を撮影したりすることができていたが、その場にいるだけで何もできていない学生もい

た。『前に踏み出す力』について、元々持っている能力の違いが顕著に表れた事例だと考えている。この問題については、その後、後述のインタビューを経験するうちに改善が見られ、全員が積極的にメモをとる姿が見られるようになり、「主体性」や「実行力」について一定の能力が養成できたと考えている。

(3) Web サイトの開設

カリキュラムにおいて、Web デザインの授業と並行してプロジェクト活動が行われたため、活動当初は、学生自身に Web サイトを構築する技術が不足していた。そのため、デザイン案とイラスト素材のみを学生が考案・作成し、サイトの“ひな型”は教員が作成することからスタートした。その後、ページ制作のスキルを身に付けた学生が中心となって、Web の更新作業を行えるようになった。

一方で、Web デザインを受講しておらず、ICT スキルの低い学生は殆どコンテンツの制作には関わらない体制ができてしまい、一部の学生に負担が集中してしまったことは反省点である。

図1に、作成した Web サイトを示す。



(a) top ページ



(b) 売店情報ページ

図1 作成した Web サイト

なお、コンテンツ制作に携わらなかった一部の学生には、教員主導で、原稿の量やインタビューの回数を増やす等の作業分担を課すことで、学生の不公平感を無くすよう心がけた。このような作業分担について、本来であれば学生主体で行うことが望ましいと考えるが、その意味では「状況把握力」の養成について、不十分な点があったと感じている。

(4) インタビュー

作成した Web サイトに掲載する情報を収集するために、関係各所にインタビューを行った。事前にインタビュー項目を考えるように指導したが、上手に相づちを打ちながら話を聞き出せる学生と、紙にメモした質問項目を読み上げることしかできない学生とで、大きな差があった。この点については、苦手な学生に過度にストレスをかけることを避けるため、特に表立って指導はしなかったが、他のメンバーの質問の様子等を見聞きするうちに、徐々に改善が見られるようになった。「発信力」や「傾聴力」について、一定の成長が見られたと考えている。

なお、インタビューの記録については、Web 更新に使用するため、メンバー全員が iPad や共有フォルダを利用して情報共有するよう行動できており、「規律性」についても成長が見られた。

また、他のメンバーのインタビューを積極的に記録する学生や、写真撮影をする学生など、特に指示しなくても学生同士で役割分担ができており、「主体性」についても養成できたと感じている。

インタビューの様子を図2に示す。



図2 のんほいパーク (バードエリア) での取材

(5) その他の広報活動

本学の学園祭には子供連れが多く来学するため、パークを宣伝する機会だと考え、どのようにすれば効果が得られるかを学生自身に考えさせた。パンフレットにシール（Web サイトへ誘導するための QR コードを記載）を貼ったり、廊下に動物園の写真を飾ったりする、等のアイデアが出され、それを手分けして具体化するまでの作業を学生主体で行うことができた。

活動を通して「計画力」や「創造力」また、「実行力」等について成長が見られたと考えている。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

(1) プロジェクト内容について

パーク来園者数の増減等、実際の効果についての検証が難しいため、自己満足に陥ってしまいがちであり、また、学生の ICT スキルに依存する面が大きいことから評価が難しいテーマだったと感じている。しかしながら、連携先の方々からは非常に好意的な反応を頂いており、学生も楽しんで活動できていたように思える。

まだまだ発信できてない情報が多く、連携先からも継続して欲しいとの意見も頂いていることから、次年度の継続も考えている。

(2) プロジェクトの進め方について

広報活動という性質上、アイデアを形にする際に、どうしても ICT スキルが問題となる。HTML の知識が無くても Web 制作が可能な CMS 等のツールを導入するなど、教員側で十分な計画・準備が必要であると感じている。また、学生に不公平感が生じないような作業の配分や、課題の設定等、活動前半については教員側の誘導が不可欠であると考えます。

また、雑談の際には非常に活発な意見交換がなされており、柔軟な意見が多く出されていることが多かったが、「今から議論せよ」と指示を出した途端に黙ってしまう学生が多かった。インタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して「発信力」や「傾聴力」を養うことができるよう、指導を改善したい。

(3) プロジェクト運営の制度について

今年度は特にリーダーを決めずに教員主導で進めたが、次年度は学生中心に運営を進めていけるよう指導したい。また、Photoshop や illustrator 等の特定のソフトウェア

のファイルを多く使用したため、プロジェクト管理システムより共有フォルダでの情報共有の割合が多くなってしまった。スケジュール管理等に、もっと管理システムを活用していきたいと考えている。

また、今年度はメンバーに転学部生が2名含まれており、受講科目等の関係から全員でインタビューに行ける時間が非常に少なく、スケジュールの管理に多大な労力を要した。プロジェクト活動を円滑に進めるため、学部の時間割の調整等に改善を求めたい。

豊橋献血促進プロジェクト

山口 満

1. プロジェクト活動の内容

近年、若年層の献血離れが深刻な社会問題となっている。本プロジェクトでは、献血に関する広報活動を通じて、豊橋市における若年層（本学学生含む）の献血率向上に貢献することを目的として活動を行った。本プロジェクトテーマは、学生間の話し合いの中、学生自身の希望により決定したものである。

具体的な活動内容は以下のとおりである。表1に、本プロジェクトのスケジュールを示す。

(1) 献血イベントの広報

ボランティアとしてこれまでに活動経験がある学生がプロジェクトメンバーに含まれていたため、この学生の主導のもと、市内で企画されている献血のイベント等の情報を広報し、実際に献血呼び掛けボランティア活動を行った。この活動を通じて、実際の現場の状況に関する理解を深めた。なお、イベント日時や場所の事前案内は、後述のWebサイトを通じて行った。

(2) 献血意識調査（アンケート）

若年層の献血に関する意識や実態を調査するため、本学の学生を対象として、献血意識調査（アンケート）を行った。結果を分析して、献血率を高めるための方策を検討し、実施計画を立案した。

(3) ヒアリング

献血に関わる方々（愛知県豊橋赤十字血液センターのスタッフ）にヒアリング（意見交換）を行い、日々献血呼びかけ活動をされている方々の実際の状況や既存の取り組み等について伺った。

(4) 献血に関する情報の発信（Webサイト構築）

プロジェクトWebサイトを構築し、献血に関する各種情報（数値データ等）をまとめ発信した。

上記のプロジェクト活動の実践を通じて、主に以下の項目について学び、理解を深めることとした。

- タスク管理、スケジュール管理、共同作業
- 情報の収集および整理・分析方法
- 目上の方との接し方（依頼の方法など）
- アンケートの作成方法・集計方法の理解
- データ処理（Excel など）を通じた情報リテラシーの習得
- Webサイトの設計ほか情報発信に関する知識・スキルの習得

2. プロジェクトの育成すべき資質への教育効果

本補助事業は、産業界から求められる資質として、社会人基礎力に代表されるジェネラルスキル（総合力）を取り上げている。本プロジェクトにおいて、前節の知識・スキルの他に、どのように社会人基礎力の養成に繋がるかを説明する。

社会人基礎力では、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の3能力（12分類）の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、社会問題として認知されている「若年層の献血離れ」という、既に多くの団体によって取り組まれていながらも有効な改善策を見いだせていない困難な問題に取り組むことから、「考え抜く力」

表1 プロジェクトのスケジュール

5月	6月	7月	8月
プロジェクト始動	献血イベントへ参加① 17日:イオン豊橋南店	献血イベントへ参加② 22日:豊橋駅南口(サマー献血)	中間報告会
学内アンケートの作成	学内アンケートの配布	学内アンケートの集計	
	WEBサイトの作成		

9月	10月	11月	12月
名刺カード作成 ポスター作成	26・27日:創造祭にて 名刺カード配布 意見交換会のための アポ取り・資料送付	1日:意見交換会 三角柱POP作成の計画	献血イベントへ参加③ 16日:イオン豊川店(クリスマス献血) 三角柱POPの作成・設置 (教員インタビュー) 成果発表会
WEBサイトの作成			

表2 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性 働きかけ力 実行力	○ ○ ◎ 考えた施策を実行に移す
考えぬく力	課題発見力 計画力 創造力	◎ 現状分析、問題点の発見 ◎ 具体的な実施方法等の計画 ◎ 課題解決のための案の創造
チームで働く力	発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレス・コントロール	◎ 施策の議論 ◎ 施策の議論 ○ ○ ○ ○

(課題発見力、計画力、創造力)が重要となる。計画の具体化の段階では、「チームで働く力」(発進力、傾聴力)をもってメンバー間での議論が必要となる。さらに、計画した内容が正解であるかを事前に確かめるすべはないため、まずは「前に踏み出す力」(実行力)をもって実行に移さなければならない。以上のとおり、本プロジェクトの遂行にあたっては3つの能力のすべてが必要とされ、活動を通じてそれぞれが養成されることが期待される。表2に、本プロジェクトにおける体験項目をまとめる。

3. プロジェクト活動の効果に関する考察

(1) 献血イベントの広報

本プロジェクトでは、計3回、商業施設等における献血バス運行の「呼びかけ」ボランティアに参加した。初回はモチベーションを高く保ち積極的な動きがみられたものの、プロジェクトリーダーが参加困難となった後半にはメンバーのモチベーション低下が見受けられ、特に3回目に参加した学生は1名のみで2名は不参加であった。これは、土曜日や日曜日における活動であったことが原因であると考えられる(活動自体には否定的ではなかった)。学生個人の都合は理解できるものの、連携先団体との関係(期待)を考慮しての責任ある行動を取ったとは言い難いものであった。

以上の観点からは、「チームで働く力」における規律性が十分ではなかったといえる。



図1 意見交換会の様子

(2) 献血意識調査(アンケート)

メンバー間での十分な議論を経て、学生向けアンケート用紙を完成させた。また、回収後の集計作業についても、作業分担をうまく行い速やかな仕事を実現できていた。集計後の内容分析についても、学生間の意見交換が活発に行われていたため、この活動については、チームで働くことの効果を学生自身も実感できていたように思われる。

アンケート結果から課題を見つけ出し次の計画を立案する力については、教員のフォローが無ければ踏み出せなかったため、「考え抜く力」についてはまだまだ不足していると言わざるを得ない。(本年度については、スケジュールの都合もあり、指導教員から複数案を提示する等のフォローを行った)

(3) ヒアリング

(2)で集計したアンケートについて、赤十字血液センターの方々と意見交換を行った。意見交換会のセッティングについては、電話によるアポ取り、事前の資料送付のための依頼状の作成(国語教員による添削指導依頼も実施)、アンケート結果の文書化などの活動を行った。特に、アポ取りについては、そのような行為を苦手としている学生にチャレンジさせ、面識のない方とのコミュニケーションを実現させることができた。この点については、学生自身も自覚しているとおおり、よい体験をさせることができたと考えている。図1に、意見交換会の様子を示す。

(4) 献血に関する情報の発信(Webサイト構築)

プロジェクトWebサイトの構築にあたり、掲載内容や如何に注目を集めることができるか(記事を読ませるか)がポイントとなる。本来、掲載内容の検討についてはICTの専門知識は不要のはずであるが、「Webサイト」という

URL: <http://projectweb.sozo.ac.jp/myamaproj2012/>



図2 プロジェクト Web サイト

だけで、自然と得意な学生が Web 担当者に決まり、またその学生に記事（原稿）作成作業の負荷が集中する結果となってしまった。共同で記事を編集できる仕組み（WordPress）を導入したにも関わらず、一人に学生に負荷が集中してしまったことについては、指導教員の誘導の仕方に問題があったと考えられるため、今後は改善する必要がある。図2に、本プロジェクトで構築した Web サイトを示す。

なお、Web サイトへ誘導するための仕掛け（学園祭における Web サイトの紹介を記載したカードの配布、および、三角柱 POP の学生ホール等への設置）については、メンバー間でアイデアを出し合い、共同で作業できたと評価できる。これについては、3つの能力をうまく発揮できていたといえる。

学生の活動全体を振り返ると、共同して作業できたことと、そうでない活動があり、順調に進行したとは言えない。活動後半には、実行力があり、責任感が強く、規律性を重んじる特定の学生に負荷が集中する結果となった。本プロジェクトはまだ途中であるものの、現時点でこのようにまとまりのあるものを形成できたのは、その学生の力によるところが大きい。学生の自己評価においても、本人およびプロジェクトメンバーも自覚していることがわかる。活躍できなかったメンバーについては、自らを振り返ってまとめた反省点や課題を再確認し、日常の活動を通じて改善できるよう、意識して努力してもらいたい。

4. 本年度の活動を踏まえた次年度以降の進め方

(1) プロジェクト内容について

テーマが難しく成果（効果）を体感しづらいものであ

ったが、連携先の方々から評価をいただき、最終的には学生もそれなりの達成感を得たようである。継続して取り組んでほしいという要請もあることから、次年度のテーマ設定では考慮したい。

(2) プロジェクトの進め方について

学生の得意・不得意で安易に分担が決定される傾向にあり、実際に今年度は Web サイト構築や発表スライド作成等において ICT 系に抵抗の無い学生に負荷が集中する結果となった。個々の得意な部分で能力を発揮させるためのバランスのよい作業の設定・与え方を、教員が誘導しなければならなかったと感じている。あるいは、得意でない分野も苦手意識を克服できるよう、十分な余裕（時間）を持って取り組ませるような工夫が必要である。時間的な配慮は、「考え抜く力」を養成するためにも十分に確保したい。ただし、外部団体と連携して活動している都合上、進捗状況にあわせて都度最良の方法を採らなければならない。

今年度は、途中でプロジェクトリーダーが参加できない状況になり、後半はリーダー不在のまま進行してしまった。これは、制作物の完成の遅れなどの一因であったと考えられるため、次年度は改善したい。

「プロジェクト演習」時間内での口頭の議論は活発であったが、プロジェクト管理システムによる情報共有等は効果的に実施することが出来なかった。システムの効果的な利用方法の検討についても、今後の課題である。